

『法華玄義』の研究（十七）

大野 榮人
伊藤 光壽

はじめに

本論文は、『法華玄義』巻第一之上の第一部七番共解の第一章標章の第五節「教相」の部分を原典解明していくことを意図して究明していくものである。

本研究は、平成二十三年度春学期（四月～七月）の大学院文学研究科博士前期課程および後期課程の「演習」の授業の研究成果である。授業の受講生は、仏教学仏教史学専修（Ⅱ）の次の諸氏である。

萩千秋（前期一年）、ダオトリン チン ニヤン・トラン クオツ
クフォン（ベトナム）（後期一年）、川瀬隆（後期二年）、加藤高敏
（後期三年）、伊藤光壽（研究生）、武藤明範・水野莊平・久田静
隆・猿渡あゆみ・トラン トウイカン（ベトナム）、加藤正賢（研
究員）、當間日澄・今井勝子（聴講生）

授業は、輪読形式で行ない、右記の大学院生諸氏が下調べをして発表してもらい、それを伊藤光壽氏が毎時間「書き下し文」、詳細で膨大な

「注」、的確な「現代語訳」を作成して頂き、それを私が加筆し、それを訂正して頂いて、授業で読み合わせをして、完全な原稿を作成したものである。

伊藤光壽氏のご尽力により、このような研究成果を世に送り出すことができることに衷心よりお礼を申し上げる次第である。

伊藤光壽氏をはじめ、大学院受講生全員の智慧を結集してできなかった研究成果であるが、恐らく誤記・誤読など多くあることと思われる。その責任の全ては、私にあることをお断りしておきたい。大方のご批判・ご教示を賜れば幸甚である。

本論文の構成は、最初に「原文」と「書き下し文」を、つぎに「注」を、最後に「現代語訳」を付していくことにしたい。

（原文）

祕密不定其義不_レ然。如來於_レ法得_二最自在_一。若智若機若時若處。三密四門無_レ妨無_レ礙。

（書き下し文）

祕密不定は、その義しからず。

如來は、法において最も自在なるを得。

もしは智もしは機、もしは時もしは處、三密、四門、妨なく礙なし。